様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００９３９

研究課題名（和文）国郡境目紛争データベース作成による日本中世の戦争と秩序形成に関する研究

研究課題名（英文）Research on War and Order Formation in Medieval Japan by Creating a Database of Border Disputes between Provinces and Counties

研究代表者
小林　一岳（Kobayashi, Kazutake）

明星大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２９８０６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本中世の紛争と戦争について、その基礎的な構造を明らかにしようとした研究である。本研究では、特に日本の国境と郡境における紛争及び戦争に注目し、全国的に関係する史料を収集し、その原因・経過・結果・解決方法等についてのデータベースを作成する作業を中心に研究を実施した。
　その結果、国境・郡境をめぐる紛争は平安～鎌倉時代から存在するが、特に戦国時代はデータ数が多く、戦争の主要な原因であることが確認された。また、地域的には特に京都周縁地域では山野をめぐる紛争と深く関係していることが明らかになり、辺境地域との比較が重要な課題となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　人類の課題のひとつは、地域紛争の解決である。現代の戦争・紛争は地域紛争が中心であり国境に限定されていない。日本中世の戦争も、国境や郡境を意識しながらも地域紛争として戦われる。中世における国境・郡境の持つ意味について考えることは、現代の紛争について考える際にも大きな意味がある。
　国郡の意味については、その枠組みが各時代を通じて意味を持ったとする議論とその地域区分が、紛争と紛争解決から生まれたファジーなものであるという議論が対立している。
　研究上議論となっている、中世の紛争と紛争解決における国郡という地域区分の持つ意味を検討する際に、本研究により作成したデータベースは重要な意味を持つ。

研究成果の概要（英文）：　This study attempts to clarify the basic structure of conflicts and wars in medieval Japan. This study paid particular attention to disputes and wars at Japan's borders and county boundaries, and focused on the task of collecting relevant historical documents nationwide and creating a database on the causes, course, results, and resolution methods of such disputes and wars.As a result, it was confirmed that disputes over border/county boundaries have existed since the Heian to Kamakura periods, but especially in the Sengoku period, the number of data is large and they are the main causes of wars. In addition, it became clear that regionally, especially in the Kyoto periphery, the conflicts were deeply related to the conflicts over mountains and fields, making comparisons with frontier regions an important issue.

研究分野：日本史

キーワード：戦争　秩序　紛争　国境

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

21 世紀の人類にとって最大の課題のひとつは、地域紛争の解決であるといえよう。近代国民国家は、領土を持ち国境が形成される。理論的には近代国民国家の戦争は国境で行われることになるが、現実では中東やアフリカ等で見られるように、現代の戦争・紛争は地域紛争が中心であり国境に限定されていない。日本中世の戦争も、伝統的な地域区分である国境や郡境を強く意識しながらも実際は地域紛争として戦われる。中世の紛争における国境・郡境の持つ意味について考えることは、21 世紀の紛争について考える際にも大きな意味があると考えられる。

この問題に関する国内の研究としてまず挙げられるのは、藤木久志による豊臣平和令に関する研究である（藤木『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会 1985）。藤木は戦国時代の戦争を「国郡境目相論」と位置づけ、戦国大名の同盟（国分け）の分析から、領土紛争が解決される際の領土確定の単位が一国・半国または郡であったことを指摘した。いわば中世の伝統的な地域区分に準じて、領土確定が行われていたのである。そのため、国分けは正当性があるものとして位置づけられ、当事者大名のみではなく、当事者を超えて保障されていた。豊臣政権は、この大名相互の領土確定方法を発展させた惣無事令という法令発布による解決を行っていたのである。

この中世の伝統的地域区分としての国郡の持つ意味にしては、高木昭作に代表されるように国郡制的枠組みが古代から中世・近世へと各時代を貫通し、実質的な意味を持ったとする議論がある（高木昭作『日本近世国家史の研究』岩波書店 1990）。それに対して、遠藤ゆり子によれば戦国期の国郡という地域区分は、伝統的な国郡制的枠組みとは異なり、紛争と紛争解決から生まれたファジーな地域区分であることが指摘されている（遠藤ゆり子『戦国時代の南奥羽社会』吉川弘文館 2016）。また、稲葉継陽は、戦国大名の国分けから惣無事令にもとづく国郡の境界設定、さらには近世の元禄期の国絵図作成までを検討し、いずれの領域秩序においても最初から国郡境目が確定されているわけではなく、その境界は国境地帯の山野に関する村落間紛争を通じて形成された自律的な秩序に規定されていたことを指摘している（稲葉継陽『日本近世社会形成史論』校倉書房 2009）。

このように研究上議論となっている中世の紛争と紛争解決における国郡という地域区分の持つ意味を考える際には、中世全期にわたる国郡境目紛争の史料をできる限り収集し、その上で研究を進めていくことが必要になる。

この問題について日本史以外の研究を参照するならば、ヨーロッパ史ではティロルというオーストリア・イタリアの国境地帯についての服部良久氏の研究がある（服部良久『アルプスの農民紛争』京都大学学術出版会 2009）。服部は牧草地をめぐる村落間の入会地紛争と紛争解決システムから領邦国家としてのティロルの国制形成を見通している。また、イタリア史の佐藤公美は、ミラノ周辺のコムーネ（村落共同体）間の紛争からミラノを中心とする国制の成立を考えている（佐藤公美『中世イタリアの地域と国家』京都大学学術出版会 2012）。このようにヨーロッパ史の場合は、紛争と紛争解決から国制を見通す研究が行われているが、日本の国郡という地域区分の持つ意味について、ヨーロッパ史との比較研究も必要になるであろう。

２．研究の目的

本研究は戦争の時代である中世において主たる戦争である国郡の境界紛争（ここでは国郡境目紛争と称する）についてデータベースを作成し、公表することを主な目的とする。また、適切な地域を選定した関係する史料調査やフィールドワークにより、国郡境目紛争地域の歴史的背景を比較的にさぐることも同時に行いたい。そして、作成データについての分析・研究と、フィールドワークの調査・研究成果を総合させることで、平安・鎌倉期から戦国期・統一政権期にいたるまでの、中世の戦争の特質についてあらたな視点からの新知見を獲得することを目指すものである。

３．研究の方法

データベースの作成については各自治体史から国郡紛争の史料を抽出する作業を行った。収集方法としては情報カードに必要項目を記入する形で実施した。情報カードのフォーマットについては、国郡境目紛争に関する、①年、②月、③日、④地域、⑤紛争当事者、⑥紛争の原因・状況、⑦解決方法、⑧原出典、⑨掲載書誌等の情報を盛り込むこととした。

地域調査の候補地としては、第１に、伊賀国周辺地域を設定した。伊賀は周囲を近江・山城・大和・伊勢国に囲まれ国境紛争が多発する地域である。先に作成した山野紛争データベースにおいても、山野紛争が多発しており、山野紛争と国郡境目紛争との関係をさぐるのには適切な地域である。また天正年間に甲賀と伊賀の国境紛争が勃発するが、これは山野紛争を基礎とした国境紛争であり、甲賀郡中惣・伊賀惣国一揆双方の合議により一時的に解決されるものの、なお紛争

は継続される。このように、惣国一揆と国郡境目紛争を考える際には重要な地域である。第２には播磨・摂津・丹波国境地帯を設定した。この地域は、平安期から摂津住吉社領の杣山が国境を越えて広がり、それが分割されて領域型荘園が形成される地域である。そして山野紛争と国境紛争がリンクしながら近世に至るまで続く、有数の紛争地帯であるといえ、山野紛争と国境紛争との関係を検討するのに相応しい地域である。特に国境地域に所在する山岳寺院である清水寺に多くの紛争関係史料が所蔵されていることが知られ、その調査を行うことを目的とした。第３に地域的な比較をするために、辺境地帯として九州の肥後・筑後・肥前国境地帯を設定した。この地域の場合は、南北朝期以来菊池氏や三池氏等の国人・国衆レベルの地域権力が複雑な動きを示し、それが戦国期までの継続的な国境紛争と密接に関連していたことが知られ、畿内周辺の紛争との類似点や相違点について考察することにした。

４．研究成果

本研究の基本であるデータベース作成作業については、５名の研究協力者に依頼して作業を進め、東北・関東から収集作業を進めた。その結果中部地方にまでについては収集作業がほぼ終了した。しかし新型コロナのため各大学図書館の利用などが制限されるとともに、近畿・中国・四国・九州の関係史料についてはあたるべき自治体史の数も多く、思い通り進めることができなかった。今後さらに科研の申請を行うなど継続的に作業を行い、データベース公開にむけて研究を継続したい。現在 900 点以上の関係史料の抽出を行うことができ、ほとんどが戦国期の史料であった。これは戦国期の紛争・戦争が国郡境目紛争として戦われたことをよく示していると言える。なお、鎌倉期までの関係史料については、印刷した研究成果報告書の形で公表した（2018 年度～2022 年度科学研究費補助金基盤研究（c）研究成果報告書『国郡境目紛争データベース作成による日本中世の戦争と秩序形成に関する研究』）。

伊賀をめぐる国境地帯については、伊賀・近江・大和国境地帯の調査・巡検を実施した。その結果この地域が平安期以来の有数の紛争地域であることが再確認できた。特に名張川や木津川等の河川交通を通じての材木流通が盛んに行われて畿内の権門寺社へと運ばれ、そのため東大寺や春日社等の権門寺社間の紛争が惹起し、それが国郡境目紛争へと接続していくことが明らかになった。また、伊賀・甲賀国境地帯の天正元年の紛争に関する史料調査を行った。調査した史料は、紛争解決を伊賀惣国一揆及び甲賀郡中惣がお互いに誓約した起請文であるが、史料の原本調査の結果、史料集などでは翻刻されていない甲賀郡中惣構成メンバーの連署が確認できた。これは今後の研究を進める上で重要な知見であると考えられる。さらに伊賀市教育委員会に所蔵される近世の国境紛争関係史料を調査し、目録化して成果報告書に所収するとともに、天正期の国境紛争について考察した論考を報告書に所収した（長谷川裕子「甲賀郡奉行人惣・伊賀奉行人惣連署起請文」（天正起請文）にみる甲賀・伊賀国境紛争）。

播磨摂津・丹波国境地帯については、国境地域の住吉社領の広がりの確認と、関係史資料の現況・所蔵状態についての調査を実施した後、播磨清水寺文書の調査・写真撮影を行った。また紛争地域の中心にあたる大川瀬住吉神社に所蔵される、南北朝期のものとされる住吉社領の絵図についての実見調査を実施した。特に足利義詮とされている裏書き花押について検討をおこなった。さらにそこに所蔵される住吉関係縁起についても調査を行った。清水寺の紛争関係史料については報告書に写真を掲載し、また絵図や縁起についても写真や翻刻を報告書に掲載した。これらの史料を総合的に検討することで、古代の大寺社の杣から領域型荘園が成立し、さらにその領域に規定されながらも、国郡境目紛争が中世を通じて性格を変えながら継続することが明らかになると考えられる。なお報告書には義詮の花押についての考察（田中大喜「住吉神領杣山四至並造替諸役差定書の裏花押について」）、及び縁起についての考察（窪田涼子「大川瀬住吉神社蔵「住吉宮造次第」について」）を所収した。肥後・筑後・肥前国境地帯については、全体を把握するための調査を実施したが、そこでは肥後・筑後を結ぶ交通路沿いに領主が存在し、主に南北朝期や戦国期に紛争を繰り返していることが明らかになった。今後は当該地域の関係史料調査やフィールドワークを実施することで畿内・近国地域との比較を課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 稲葉継陽	４．巻 5
２．論文標題 近世初期における諸国城割と地域社会―藩政成立史序説―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 永青文庫研究	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高木徳郎	４．巻 102
２．論文標題 環境史研究から生業の実態認識へ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 民衆史研究	６．最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷川裕子	４．巻 858
２．論文標題 日本中世史・近世史研究のなかの民衆	５．発行年 2021年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲葉継陽	４．巻 354
２．論文標題 細川幽斎・明智光秀と「天下泰平」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 茶道雑誌	６．最初と最後の頁 1～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲葉継陽	４．巻 4
２．論文標題 近世初期における給人地支配の危機と統制	５．発行年 2021年
３．雑誌名 永青文庫研究	６．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高木徳郎	４．巻 7
２．論文標題 大学研究室による荘園調査の意義	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Waseda RILAS Journal	６．最初と最後の頁 391-400
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲葉継陽	４．巻 2
２．論文標題 近世初期における百姓の法的地位と村共同体－島原一揆後の地域復興をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 永青文庫研究	６．最初と最後の頁 １-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 稲葉継陽
２．発表標題 初期小倉藩・熊本藩の手永制と惣庄屋
３．学会等名 日本・インド・朝鮮比較史科研費研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 稲葉継陽
２．発表標題 初期細川家中の構成と変容―知行制・上方米市場・請免制―
３．学会等名 永青文庫研究センター主催シンポジウム「熊本藩から見た日本近世」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計18件

１．著者名 稲葉継陽	４．発行年 2021年
２．出版社 塙書房	５．総ページ数 45
３．書名 藤田達生編『織田政権と本能寺の変』（執筆部分「明智領国の 形成と歴史的位置」	

１．著者名 稲葉継陽	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 34
３．書名 今村直樹・小関悠一郎編『熊本藩からみた日本近世』（執筆部分「初期大名領国における知行制と村請制―寛永十三年熊本藩郡方改革をめぐっ て―」	

１．著者名 稲葉継陽	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 34
３．書名 蔵持重裕編『日本中世社会と村住人』（執筆部分「近世初期領国境目地域における庄屋と百姓鉄炮」	

１．著者名 遠藤ゆり子	４．発行年 2022年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 24
３．書名 蔵持重裕編『日本中世社会と村住人』（執筆部分「中近世移行期の浅利氏と比内の村々―陸奥・出羽国境の境目争い」	

１．著者名 遠藤ゆり子	４．発行年 2022年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 7
３．書名 川岡勉編『中世後期の守護と文書システム』（執筆部分「中世後期守護研究の手引き」）	

１．著者名 小林一岳	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 22
３．書名 蔵持重裕編『日本中世社会と村住人』（執筆部分「村の自立と紛争・内乱－紀伊国三上荘願成寺と西畑村」）	

１．著者名 高木徳郎	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 22
３．書名 田中大喜編『中世武家領主の世界－現地と文献・モノから探る－』（執筆部分「紀伊国における武家領主の地域支配と荘園領主」）	

１．著者名 長谷川裕子	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 32
３．書名 蔵持重裕編『日本中世社会と村住人』（執筆部分「若狭湾沿岸における海村の生業競合と地域社会－常神半島・三方五湖をとりまく村々の地域的分業」）	

１．著者名 稲葉継陽	４．発行年 2020年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 59
３．書名 公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫の古文書 光秀・葡萄酒・熊本城』	

１．著者名 稲葉継陽	４．発行年 2020年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 36
３．書名 稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』	

１．著者名 稲葉継陽	４．発行年 2021年
２．出版社 上天草市	５．総ページ数 113
３．書名 稲葉継陽・鶴嶋俊彦『上天草市史 姫戸・龍ヶ岳町編３ 中世 戦国天草の領主一揆と城』	

１．著者名 遠藤ゆり子	４．発行年 2020年
２．出版社 岩田書院	５．総ページ数 17
３．書名 南奥羽戦国史研究会編『伊達政宗　戦国から近世へ』	

１．著者名 高木徳郎	４．発行年 2019年
２．出版社 調査報告書	５．総ページ数 66
３．書名 『伊賀国鞆田荘地域調査』	

１．著者名 長谷川裕子	４．発行年 2019年
２．出版社 小径社	５．総ページ数 9
３．書名 樋口州男・戸川点・野口華世・小林風・中村俊之編『歴史の中の人物像ー二人の日本史ー』（執筆部分浅井長政と朝倉義景）	

１．著者名 遠藤ゆり子	４．発行年 2020年
２．出版社 『科研費研究成果報告書　中世後期守護権力の構造に関する比較史料学的研究』	５．総ページ数 18
３．書名 「陸奥・出羽両国における管領・探題・守護受発給文書目録の解説」	

1．著者名 小林一岳	4．発行年 2018年
2．出版社 同成社	5．総ページ数 23
3．書名 小林一岳編日本中世の山野紛争と秩序（執筆部分日本中世の山野紛争と秩序について）	

1．著者名 小林一岳	4．発行年 2018年
2．出版社 岩田書院	5．総ページ数 21
3．書名 悪党研究会編南北朝「内乱」（執筆部分南北朝内乱と悪党・地域秩序・幕府）	

1．著者名 稲葉　継陽	4．発行年 2018年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 256
3．書名 細川忠利	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	稲葉　継陽 (Inaba Tuguharu) (30332860)	熊本大学・文学部・教授 (17401)	
連携研究者	遠藤　ゆり子 (Endou Yuriko) (70612787)	淑徳大学・人文学部・教授 (32501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	高木　徳郎 (Takagi Tokuro) (00318734)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	
連携研究者	長谷川　裕子 (Hasegawa Yasuko) (20635122)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関